

低開発国の経済発展と国家資本主義(完)

——「非資本主義的発展の道」論の検討——

丹羽克治

はし
が
き

一 低開発国の当面の課題

二 「今日の国際関係」と低開発国……………(以上、第二十四卷第二号所載)

三 低開発国の「社会・経済構造」

四 「総括的経済範疇としての国家資本主義」

(一) ……………(以上、第二十四卷第三号所載)

(二)

(三)

(四)

五 低開発国における階級構成

(一) ……………(以上、第二十四卷第四号所載)

(二)

(三)

六 「非資本主義的発展の道」の展望

むす
び……………(以上、本号所載)

低開発国の経済発展と国家資本主義(完)

五 低開発国における階級構成

(一)

前項でみたように、尾崎氏は、第二章第二節の前半において、「国家資本主義に対する階級関係はいかん」という問題を考察して、「今日の条件のもとでは」国家資本主義とその発展のみがプロレタリアートの「成長」と利益を保障すると主張することによって、客観的には、プロレタリアートの根本的利益をうらぎる結果に到達されたのであった。つづいて氏は、同節後半において、「低開発諸国における社会（階級）構成の特殊性」という小見出しのもとに、低開発国に現存する諸階級をとりあげ、その「配置の特殊性」について考察しておられる。

氏は、低開発国では、国ごとに「社会経済の発展水準の違い」または「社会情勢の甚だしい特異性・多様さ」がみられるが、全体としてみれば、「諸国の経済関係は本来的に遅れたものであり」、かくして資本主義的諸階級は現在「編成」されつつあるか、または「萌芽的にしかみられない」状態である（尾崎彦朔編著『低開発国政治経済論』、四三ページ）と述べて、低開発国における「階級の構造」とその「配置の特殊性」を「遅れた諸社会経済構成（ウクラード）の重層」との関連のもとに明らかにしようとしておられる。

ところで、低開発国の「遅れた諸社会経済構成の重層」したがってまた「階級構成の特殊性」は植民地時代から「継承」したものである。だから、低開発国における諸階級とその「配置の特殊性」を明らかにするためには、あらかじめ、独立前における諸階級とその「配置の特殊性」をとらえておくことが必要である。そこで、氏はまず植民地の諸階級をとりあげて、つぎのような説明をあたえておられる。

植民地・半植民地では、資本主義的生産方法のもとの諸階級——ブルジョアジーとプロレタリアート——の比重はそう大きくないが、前資本主義的諸ウクラードに結びついたものは大きい。そこでは、封建制または原始社会体制が尾をひいている。個々の国では、植民地支配国家の干渉によって「ブルジョア化」または「封建化」がおこなわれ、それらの制度的に上昇せる要素を通じて、植民地支配が貫徹され、「ブルジョアジー」は半封建的搾取の方法を広汎に利用した。こうして生れてきた地主は、往々にして商人、高利貸を兼ね、対局に小農民を、小作人、雇農に凋落させ、半封建的搾取を通じて借金奴隷的地位に釘づけにする。雇農は、さらに都市の日傭労働者でさえ、完全な意味では生産手段を放棄しておらず、生計の主要基礎が雇用関係に移ったものの、なお依然として、一方においては零細な自家耕作者でもある。彼らの階級的性格は現代プロレタリアートとは区別される。「半」プロレタリアートである。これら極貧農層の大きな比重が示しているものは、明らかに過剰人口と窮乏の実体であり、古い階級構造の崩壊である。他方、資本主義的大規模生産のもとにおけるプロレタリアートはさほど大きな地位を占めていない。彼らもまた、貧農・農業労働者同様、大部分は階級身分としての農民から最終的に分離しておらず、半プロレタリア、半農民、半窮民、半失業者の特徴を一身に背負ったものである（前出、四三―五ページ、傍点およびゴシック体——丹羽、以下同じ）。

右が植民地・半植民地における諸階級についての氏の説明の概要である。いま、右の説明にでてくる諸階級を列举してみれば、つぎのとおりである。

第一に、「ブルジョアジー」——これだけが氏によってカッコつきで示されている——である。これは、植民地支配がおこなわれるなかで、「半封建的搾取の方法を広汎に利用した」ところで、これは、いったい、植民地のブルジョア

ヨアジーであろうか、それとも植民地支配國家のブルジョアジーであろうか？　ここでの問題が植民地・半植民地内部の諸階級とその「配置の特殊性」を究明することであるという点から推測すれば、前者であるということができよう。もしそうだとすれば、これは植民地支配國家のブルジョアジーと結託し、その手先として發展してきたもの、すなわち買弁ブルジョアジーであると考えられる。第二は、「地主」である。これは植民地支配のもとで「生れてきた」ものであり、商人・高利貸をかねている。第三は、「小農民」である。これは「地主」によって凋落させられ、小作人、雇農、さらに都市の日傭労働者となる。後二者は生産手段を完全に放棄したものではなく、依然として零細な自家耕作者でもある。かれらの階級的 성격は「半プロレタリアート」であり、「極貧農層」として把握される。第四は、「資本主義的大規模生産のもとにおけるプロレタリアート」である。これの比重は大きくなく、しかも貧農・農業労働者と同じように「半プロレタリア、半農民、半窮民、半失業者」の特徴をおびている。したがって、その階級的 성격は「現代プロレタリアートとは區別される」ものである。

すでに本稿第一節第二項（本誌第二十四卷第二号）においてみたように、帝國主義は植民地を自己の原料・食糧供給地および商品販売市場に転化して搾取と収奪をおこなうために、一方では農村共同体と独立生産者を破壊し蚕食するとともに、他方では古い支配機構を積極的に利用すべく、これを温存・維持する。帝國主義は封建的支配勢力と機構を維持強化するのである。植民地の封建的地主のうち、あるものは植民地に転化する以前から存在していたが、あるものは植民者によって新たに扶植された。これらの温存または扶植された地主は、帝國主義支配機構のなかに編入されて、植民地支配の社会的・階級的基盤となっている。ところで、本國の金融資本は植民地のあらゆるものを統制し支配することができる。それは原料・食糧の確保、製品の販売だけでなく、銀行、保險、運輸、鉱山、財政にいたる

までを支配する。このような支配とその強化につれて、金融資本のために、その業務を代行する階級が形成されてきた。これが買弁ブルジョアジーである。これは封建的支配勢力と複雑にからみあっており、両者が手をたずさえて帝国主義支配機構の一部を構成しているのである。

帝国主義の支配のもとでは、農村共同体は破壊され、手工業は没落し、農民は買弁商人に従属し零落させられていく。農民は土地耕作の面では封建的地代をつうじて搾取され、流通の面では生産物を低価格で買いたたかれることによって収奪される。こうして農民は零落し、その一部はプロレタリアに転落する。後者はきわめて低い賃銀で酷使される。植民地社会の底辺には、尨大な貧民層が形成される。また、本国資本の侵入にともなって、商品生産が發展し、徐々にではあるが、民族ブルジョアジーが生成してくる。かれらは帝国主義・封建的勢力・買弁資本からたえず攻撃と掠奪をうけているために、反帝・反封建・反買弁資本という性格を有している。だが、かれらは脆弱であり、帝国主義・封建的勢力・買弁資本に依存しているために、右の性格もたえず弱められている。

植民地における諸階級およびその地位が以上のとおりだとするならば、諸階級の基本的な対立関係は、帝国主義およびその手先である封建的地主・買弁ブルジョアジーを一方とし、プロレタリアート・農民および民族ブルジョアジーを他方とする、二つの勢力間の対立である、と規定することができるであろう。

ところが、さきの氏の説明には、第一に、民族ブルジョアジーが欠落しており、第二に、「資本主義的大規模生産のもとにおけるプロレタリアート」が「半プロレタリア、半農民、半窮民、半失業者」の特徴をもつものと規定されている。氏は、第二章第一節において、「低開発諸国の、つい昨日までの状態では、……労働者階級の形成も、民族ブルジョアジーの發展も極めて緩慢であった」が、「彼らは、民族全体としてのこれら諸国の独立のための闘争の

主体となった」（前出、三〇ページ）と述べて、両者が「独立のための闘争」においてはたす大きな役割を指摘しておられた。また、独立後には、民族ブルジョアジー（あるいはそれと他の階層との連合）が政府を樹立し（前出、三五ページ）、国家の階級的な性格が民族ブルジョアジー（あるいはそれを中心とした諸階層の連合）によって形成されている（前出、三八ページ）と主張しておられた。このように独立闘争の「主体」となり、独立達成後には国家権力を掌握することになった民族ブルジョアジーが氏の説明には欠落しているのであり、また独立闘争のもう一つの「主体」である労働者階級が貧農・農業労働者と同じもの、すなわち「現代プロレタリアートとは区別される」ものとしてとらえられているのである。

民族ブルジョアジーの欠落は、ここでの説明の重点が植民地の諸階級のうち「前資本主義的諸ウクライドに結びついたもの」を明らかにすることにおかれているために、生じたのであろうか？ もしそうだとすれば、民族ブルジョアジーは「資本主義的ウクライドに結びついた諸階級」を説明するさいにとりあげて論じられることになるであろう。

しかし、ここがいには、「資本主義的ウクライドに結びついた諸階級」をとりあげて論究した個所は見あたらない。「資本主義的ウクライドに結びついた諸階級」の一つであるプロレタリアートについては、ここで論じられているのである。しかるに、民族ブルジョアジーについては、まったく——独立後における諸階級を論じた個所においても——とりあげられていない。

民族ブルジョアジーの欠落を第二の点——「資本主義的大規模生産のもとにおけるプロレタリアート」は「半プロレタリア、半農民、半窮民、半失業者」の特徴をもっているという規定——とあわせて考えるとき、氏の意図は明白

になる。それは低開発国における「階級関係の未成熟」すなわち「資本主義的諸階級の未成熟」を強調することである。この意図を実現するための伏線として、氏は、植民地における諸階級を説明するにさいして、さきに、独立闘争および民族国家の形成においてはたす役割を高く評価しておられた民族ブルジョアジーと労働者階級について、前者を欠落させ、後者を貧農と同じ性格のものとして描いておられるのである。

(三)

さて、氏が列举された植民地における諸階級は、独立達成によって「消失」するものではなく、依然として独立後にも——その勢力があるいは弱化し、あるいは強化されて——存続しており、民族国家の発展に多かれ少かれ影響をおよぼしているものと考えられる。ところが、氏によれば、それら諸階級はどれも独立後における「国民経済建設の担い手」(前出、四七ページ)にはなりえないのである。「担い手」は国の工業化をつうじて、とくに「国家資本主義のもとでの産業企業」のなかで新たに形成されなければならないし、事実、形成されている、というのである。

「経済自立化への道、経済発展は、国の工業化を通じてはじめて可能であるが、そのことは工業プロレタリアートの成長を必然のものとする。現代的タイプの工業労働者の成長は、その場合、小生産者の自然成長性によって保障されるのではなくて、これらの国においては、ただ国家資本主義のもとでの産業企業の発展によってのみ支持されるであろう」(前出、四六ページ)。

みられるように、「経済自立化」または「経済発展」は「工業化」をつうじてはじめて達成されるのであるが、「工業化」はまた必然的に「現代的タイプの工業プロレタリアート」の「成長」をもたらす。しかし、「工業化」一般が

「現代的タイプの工業プロレタリアート」を「成長」させるのではない。その「成長」を「支持」することができるのは、「国家資本主義のもとでの産業企業」の発展だけである！「資本主義的大規模生産」は独立前から——「さほど大きな地位を占めてはいない」とはいえ——存在していたのであるが、それが生みだすプロレタリアートは「現代的タイプのプロレタリアート」とは異なっており、「半プロレタリア、半農民、半窮民、半失業者」の特徴をおびたものであり、新しい「国民経済の建設」において積極的な役割をはたしえないものである。新しい「国民経済建設の担い手」となりうるものは、「現代的タイプの工業プロレタリアート」でなければならないのである。

ところで、氏によれば、「現代的タイプの工業プロレタリアート」が「成長」しないかぎり、「国民諸階層中に占めるプロレタリアートの量・質の比重」を高めることはできず、後者の「比重」が大きくならないかぎり、民族民主革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーを確立することはできないのであった。したがって、民族民主革命の遂行にとってもっとも重要な問題の一つは、「現代的タイプの工業プロレタリアート」をどのようにして「成長」させるか、ということでなければならない。氏にあっては、これにたいする解答はすでにあたえられている。国家資本主義が問題を解決してくれるのである。「国家資本主義のもとでの産業企業」が、しかもこれのみが、「工業プロレタリアートの成長」をもたらすのである。かくして、民族民主革命をおしすすめる勢力、なかんずくプロレタリアートのもっとも重要な・第一義的な任務は、「国家資本主義のもとでの産業企業」を発展させることである、という結論が導きだされることになる。

プロレタリアートは、たしかに、独立後の「工業化」の過程で、とくに「国家資本主義のもとでの産業企業」の発展とともに急速に「成長」しつつあり、その組織力・政治力も増大しつつある。しかし、氏のように、プロレタリア

ートを「現代的タイプの工業プロレタリアート」と「半プロレタリア、半農民、半窮民、半失業者」の特徴をもつものとわけて、前者は「国家資本主義のもとでの産業企業」の発展によってのみ「成長」し、これいがいの「資本主義的大規模生産」によっては生みだされないものであり、したがって「国家資本主義のもとでの産業企業」のプロレタリアートのみが「国民経済建設の担い手」となりうるするのは、きわめて問題であるといわなければならない。たとえば、すでに植民地時代から資本主義の発展がある程度おこなわれていた若干の国々（インド、中国、南米の二、三の国々）では、プロレタリアートの「成長」が独立前からみられ、民族解放闘争において一定の——中国においては決定的な——役割を演じてきた。このばあいのプロレタリアートは、氏の規定によれば、後者の特徴をもつものであり、したがって「国民経済建設の担い手」にはなりえないものである。ところが、ほかならぬこのプロレタリアートが、とくに中国では、「国民経済建設の担い手」として大きな役割をはたしているのである。

これにたいして、ブルジョアジーは帝国主義にたいする立場と態度とによって買弁ブルジョアジーと民族ブルジョアジーとに区分される。後者は多くの国で民族解放運動のヘゲモニーをにぎり、独立達成後には権力を掌握して、経済自立化のための諸方策をおしすすめてきた。その結果、ある程度の経済発展が達成され、民族ブルジョアジーの地位が全体として高まることになった。それとともに、資本主義的生産関係が拡大・強化され、民族ブルジョアジーとプロレタリアートとの対立がしだいに深まっていった。他方、帝国主義は封建的地主や買弁ブルジョアジーよりもしだいに民族ブルジョアジーとのむすびつきを強め、これを利用する傾向を呈するようになってきた。帝国主義は、かつては封建的地主や買弁ブルジョアジー——とくに前者——を植民地支配の第一の階級的基盤としていたが、こんにちでは——とくにアメリカ帝国主義は——民族ブルジョアジーを（ただし、カイライ政権のもとでは依然として買弁

ブルジョアジーや封建的地主を）、その支配をおしすすめるうえでの重要な階級的足場としている。かくして、民族ブルジョアジーは動搖を強めることになり、一方では、その上層と高級官僚がむすびつき、他方では、外国「援助」の受けいれにともなつて、民族ブルジョアジーおよび官僚ブルジョアジーと帝国主義との結合關係が形成・強化されることになった。

農民は低開発国人口の最大部分を占めている。それは、氏が強調されるように、「全人口の五〇〜九〇％におよんでいる」（前出、四五ページ）。しかし、かれらの大半は土地のすくない貧農や土地を全然もたない小作人であつて、封建的地主——これは土地改革などのために弱体化したが、しかしその勢力は依然として強力である——の苛酷な搾取と収奪のもとにしばりつけられている。かれらは民族民主革命における最大の勢力であり、プロレタリアートのもつとも信頼しうる同盟者である。

以上の諸階級とともに、注目されなければならないのは、インテリゲンチヤ・官吏である。氏はその役割を高く評価して、大要つぎのように述べておられる。

インテリゲンチヤ・官吏は、「現代的タイプの工業プロレタリアート」とならんで、重要な意義をもっている。かれらの組成根拠は一樣ではないが、ごく限られた上層ブルジョア階層が主導的な要素となつている。主要なものは政府、高級官僚、いわゆる「官僚ブルジョアジー」である。しかし、インテリゲンチヤ・官吏の基本的大衆は、自己の地位、生活水準からみて、プロレタリアートに近接しており、ブルジョアジーとプロレタリアートの中間の地位におかれている。インテリゲンチヤは殆ど独占的に国の職業的政治的活動を担当しており、あらゆる政党の指導的な幹部、労働組合を含む多数の大衆組織の指導者となつている。かれらは植民地時代にはみずからの役割を低下させるか、あ

るいは反体制的な意味においてしか存在することはできない。国民経済の自立化の過程の開始において、はじめて、その政治的活動の自由と、それに従属する解放された科学技術の新体制の中に自己を表現することができる。この意味からも、かれらは、本性として、反植民地的存在であり、民主主義革命の擁護者であり、新しい国民経済建設の担い手となるものである（前出、四六〇七ページ）。

みられるように、氏によれば、プロレタリアートばかりでなく、インテリゲンチヤ・官吏もまた「反植民地的な存在」であり、「民主主義革命の擁護者」である。しかも、かれらの「主導的要素」となっているのは「官僚ブルジョアジー」である。氏は「官僚ブルジョアジー」をプロレタリアートと同様に「反植民地的存在」、「民主主義革命の擁護者」としてとらえておられるのである。「官僚ブルジョアジー」はたしかに「反植民地的・親民主主義的品格」を有している。だが、同時に、「親帝国主義的・反民主主義的品格」をも有している。最近では、後者の品格がより強くなってきている。したがって、「官僚ブルジョアジー」を前者の品格においてのみとらえるのは、きわめて一面的な把握であるといわなければならない。

「官僚ブルジョアジー」をインテリゲンチヤ・官吏の「基本的大衆」と一緒にして、これらが「反植民地的存在」であり、「民主主義革命の擁護者」であると規定することは、「官僚ブルジョアジー」を「現代的タイプの工業プロレタリアート」とともに「国民経済建設の担い手」としてとらえるために、是非とも必要であったのである。「官僚ブルジョアジー」を進歩的側面においてのみ把握することは、プロレタリアートを「国民経済の建設」——これはなによりもまずブルジョアジーとくに「官僚ブルジョアジー」の利益を表現したものである——に協力させ、こうして事実上プロレタリアートの利益を「官僚ブルジョアジー」の利益に従属させるうえで、どうしても必要であったのである。

る。さらに、「国民経済の建設」を「全民族的課題」と規定しておられたのも、実は、プロレタリアートをこれに協力させ、その階級的利益を放棄させることをねらったものにほかならなかったのである。

このように、氏によれば、低開発国の当面する課題である「国民経済の建設」は主として「官僚ブルジョアジー」と「現代的タイプの工業プロレタリアート」によって担われるのであり、これら両者は国家資本主義の発展によってのみ「成長」することができるのである（ただし、プロレタリアートであっても、「現代的タイプの工業プロレタリアート」すなわち「国家資本主義のもとでの産業企業」のプロレタリアートではないのものは、「国民経済建設の担い手」にはならない）。これにたいして、農民は低開発国の人口の大部分を占めているものの、「国民経済の建設」においてはなんらの役割をもはたしえない。なぜならば、農民は「遅れた社会経済構成（ウクラード）」を反映したものであり、この「ウクラード」は「資本主義的ウクラード」に「統一」される運命にあるからである。農民は「国民経済の建設」の過程において没落して、貧農化から半プロレタリア化へ、さらにプロレタリア化せざるをえないのであり、農民としては「国民経済建設の担い手」にはならないのである。「国民経済の建設」が「全民族的課題」である以上、農民は全人口の大部分を占めているにもかかわらず、「全民族」のために、すなわち全人口の残りの「小部分」のために、自ら零落してプロレタリアに転化しなければならないが、逆に、ブルジョアジーとくに「官僚ブルジョアジー」は「全民族」の名のもとに自己の階級的利益を合理化することができる、というしだいである。

さて、氏は、低開発国の階級構成とその特殊性を以上のように把握し、そのうえにたつて、つぎに、いよいよ「非資本主義的発展の道」の「展望」を呈示すべくこころみておられる。その「展望」がどのような内容のものであるかは、低開発国の当面する課題とその「独自性」、低開発国をとりまく「国際関係」、国民経済を構成している生産関係

「ウクライナ、国家資本主義とその役割、階級構成の特殊性のそれぞれについて、氏の議論を丹念に検討してきたわれわれには、おおよその見当をつけることができるし、それが正鵠をえたものだ」と確信することもできる。しかし、氏のこれまでの議論はすべて、いわば、右の「展望」を導きだすためにおかれていると考えられるので、「展望」について吟味をくわえないでおくことは、氏の「低開発国政治経済論」、したがってまた「非資本主義的發展の道」論の理論的性格および客觀的役割を究明するうえで、もっとも肝心な点を欠くことになるであろう。そこで、われわれとしては、つぎに、これまでの検討をふまえつつ、氏の「展望」の内容をみていくことにしたいとおもう。

六 「非資本主義的發展の道」の展望

(一)

尾崎氏は終節「展望——非資本主義的發展の道」の考察を「革命主体（指導権）の問題」からはじめておられる。この問題についての氏の議論をただしく理解するためには、「革命主体」というばあい「革命」について、それがどのような内容のものとしてとらえられているかという点を、あらかじめ明確にしておくことが必要であるようにおもわれる。

氏は、「今日、民族民主革命を考察するにあたって最も重要な要点は、革命主体（指導権）の問題である」（前出、四七ページ）と述べて、その「民族民主革命」についてつぎのような註記をあたえておられる。

「帝国主義支配から民族主権を奪取して形成された低開発国にとっては、国民経済の自立化による民族国家の發展の課題が前面に押しだされた。それに対応して、帝国主義からの離脱に第一義性をもつ『民族解放革命』の用語は、

民族国家の発展に第一義性をもつ『民族民主革命』に接続発展させられたと理解すること」（前出、四七ページ）。

氏は低開発国の当面する革命を「民族民主革命」としてとらえておられるが、この「革命」においては「帝国主義からの離脱」が「第一義性」を失い、「民族国家の発展」が「第一義性」をもっている。ここに「民族国家の発展」とは、「国民経済の自立化」（「自立的な国民経済の形成」）を基本的な内容とするものである。そして「国民経済の自立化」は、すでにみたように「工業化」とくに国家資本主義の発展によって達成されるのであった。「帝国主義からの離脱」すなわち独立の課題は基本的には政治的独立を獲得したことによって達成されたのであり、いまや、「民族国家の発展」なканずく「国民経済の自立化」が「国内問題」として追求されなければならない、というのである。つまり、低開発国の当面する革命は氏によって「民族民主革命」と名づけられてはいるが、その内容は主として「民主革命」であって、「民族革命」＝「帝国主義からの離脱」は二次的な意義を有するにすぎない。しかも、その「民主革命」も国民経済のうちの「民族的近代部分」とくに「国家資本主義のもとでの生産企業」を發展させ、それをつうじて「前期的諸ウクライド」の「資本主義的ウクライド」への「統一」および「プロレタリアートの成長」をなしとげようとするものにすぎず、農民の根本的利益にかかわる土地改革をはじめとする、民主的諸課題を遂行するものではないといわなければならない。⁽³⁴⁾

(34) 氏は土地改革の重要性をみとめておられないようである。氏の論稿の七つの節をつうじて「土地改革」または「農業問題の解決」という言葉がでてくるのは、わずか数箇所である。しかも、そのばあいにも、それらの言葉は他の問題を論究するなかで、このついでに、かかげられているにすぎない。

「国民経済の自立化に対する民族要求は、……民族市場として、国内市場を確保開発し、国民経済における全般的な生産水準を引き上げようとする点で、未成熟な階級の利害は一致して現われる。つまり、全民族的な課題として、それは探しださ

れる。そこから、対外的には外国支配に対する反抗、対内的には住民の基本部分の住む農業問題を解決することによって、その基礎の上に多角的な国民経済を發展させる条件を作りだすこと、これなしには民族国家の確保と發展は不可能である。こうした要求を満たすものとして国家資本主義の方策が不可避免的に現われる」(前出、三九〇四〇ページ)。

「独立時点における帝国主義との対抗の、國際的・国内的な力關係の總和が、独立時の国家形態に民族主權の性格・強度を表現するとするならば、その後の發展を約束づける主体の力量は、何によって強化され、また組織づけられるであろうか。それは、外からの激励の声でか、あるいは遅れた農村の小生産者の中でか、あるいは外国人企業の中でか。もちろんそれらは、何程かの寄与はするであろうが、基本的には、民族的近代部門で、また一般的には、国の民主主義革命の遂行において現われる。が、具体的には、その国の土地改革、産業開發を物質的根拠として、なかならず、民族的な産業的生産現場、それらの新しい生産点を表現する国家資本主義のもとでの生産企業である」(前出、四二ページ)。

すでにみたように、低開發国はいまだ政治的・国家的独立を獲得したにすぎず——そのうちのかなりの国は形式的な独立にとどまっている——、経済的には依然として従属が維持・強化されている。そこで、民族解放を完遂するためには、政治的・国家的独立を完全に獲得し、またはいっそう強化して、帝国主義の経済的支配を一掃し、経済的独立を実現するのになければならない。それとともに、帝国主義の政治的・経済的支配とむすびついて温存されてきた封建的諸關係をも変革するのになければならない。これら二つの課題、すなわち反帝・反封建の課題を達成することが、民族民主革命の任務にほかならない。

ところが、氏は民族民主革命を主として「国家資本主義のもとでの生産企業」を發展させるものとしてとらえ、そのうえで、「革命主体(指導権)の問題」をとりあげて究明しておられる。民族民主革命の内容を誤ってとらえている以上、「主体」についての究明もまた誤ったものにならざるをえないであろう。だから、後者についての氏の説明はあらためて検討するまでもないようにおもわれる。しかし、「革命」および「主体」についての独特の理解が氏の

「非資本主義的發展の道」の把握と緊密にむすびついている。われわれは、「主体」についての説明を検討することによって、氏の「非資本主義的發展の道」論の中味を正確に理解する手がかりの一つをえられるものと期待することができるのである。

氏はまず、低開発国では、プロレタリアートはその数も組織もまだ「弱体」であって、「いまだ社会の發展を規定する階級とはなっていない」（前出、四八ページ）と述べ、これにつづいて、つぎのような説明をあたえておられる。

「これらの国では、プロレタリアートが確固とした階級として位置づけられないという条件の中で、**帝国主義、その国の封建主義・資本主義に対して闘う民族民主主義者のブロック**がなりたち、その中で最も先進的な層が、その闘争の中で核として前衛を形成、成長するのである。

マルクスもレーニンも、そして毛沢東も、社会主義革命の發展、社会主義社会の建設における**労働者階級の決定的役割を擁護してきた**。しかし、これらの国における**労働者階級の指導的役割についていうなら、いまだ整理されてはいない**。ここでは、**革命的民主主義者の緊密な統一によって資本主義への道を遮断して、非資本主義的發展への階段を進むことができる**ということである」（前出、四八ページ）。

氏によれば、低開発国では、プロレタリアートが「弱体」であるために、これにかわって、「民族民主主義者のブロック」が形成され、そのなかのもっとも「先進的な層」によって「前衛」が形成されるのである。この「民族民主主義者のブロック」こそ、革命をになう「主体」にはかならない。では、「革命主体」という決定的に重要な役割を演ずることになった「民族民主主義者のブロック」とは、いったい、どのような階級・階層から構成されているのであろうか？ また、その「指導権」はだれがにぎっているのであろうか？

ところで、「民族民主主義者のブロック」が「主体」となって遂行する革命は、民族民主革命であつたはずである。しかるに、「民族民主主義者のブロック」は「帝国主義、その国の封建主義・資本主義」にたいして闘うのである。さきには、氏は民族民主革命を「民族国家の発展」に「第一義性」をもつものとしてとらえておられたが、こんどは、革命を反帝・反封建・反資本主義の性格をもつものとしてとらえておられる。民族民主革命を「民族国家の発展」に解消し、「帝国主義からの離脱」すなわち民族解放を二次的な課題とすることが誤りであるばかりでなく、当面する革命を反帝・反封建・反資本主義の課題を遂行するものとしてとらえることもまた、とんでもない誤りではないだろうか？

低開発国は一挙に社会主義へ移行することはできない。社会主義へ移行するためには、民族民主革命と社会主義革命との二つの段階が必要である。低開発国は民族民主革命において反帝・反封建の課題を達成して、社会主義の基礎の発展・強化に道を切りひらき、こうしてはじめて社会主義革命へ移行することができる。反帝・反封建の課題を遂行することによって、既存の経済的社會構造を变革し、しだいに社会主義へ移行することのできる経済的土台をつくりあげること、これなしに、社会主義へ移行することはできない。低開発国の当面する革命を反帝・反封建・反資本主義の革命であるとすることは、民族民主革命と社会主義革命との二つの段階を混同して「一段革命」を主張することによって、低開発国人民の当面の主要な敵である帝国主義とその手先・同盟者に反対する闘争において、あらゆる愛国勢力を結集して広範な統一戦線を結成するのをさまたげるものであるといわなければならないであろう。

氏は、民族民主革命を、あるいは「民族国家の発展」に解消し、あるいは社会主義革命と混同して、革命における主要打撃の方向および革命的諸勢力の戦略的配置について大きな誤りをおかしておられる。「民族民主主義者のプロ

ック」の規定によれば、帝国主義、封建的地主および買弁ブルジョアジーばかりではなく、民族ブルジョアジーもまた、闘うべき相手であり革命の敵であることになる。「民族民主主義者のブロック」が反帝・反封建・反資本主義の革命になう「主体」であるとすれば、民族ブルジョアジーはとうてい「ブロック」の構成員にはなりえず、逆に「ブロック」によって打倒されるべき敵でなければならないのである。⁽³⁵⁾

(35) 氏は、低開発国では、「土着のブルジョアジーの力がよわく、……プロレタリアートが社会発展の指導力となっていない」が、かれらにかわって「中間的な諸層」（農民、都市下層民、インテリゲンチヤ）が「革命の指導要素」となっていると見て、つぎの問題、すなわち「昨日までの植民地・半植民地であった低開発国の社会的闘争に、非プロレタリア——半プロレタリア勤労大衆、農民を巻きこんでいく過程の客観的条件はどのようなものか」という問題を提起し（前出、五一ページ）、これに答えるなかでつぎのように述べておられる。

「第一の要因は、昨日までの植民地・半植民地における資本主義の発展が、雇用労働者の数的増大、農民分解を進め、資本主義的蓄積の強化、あらゆる被抑圧階級の困窮零落の尖鋭化をもたらしたことである。ここでの資本主義の発展は、彼らが民族解放を闘いとりながら期待したものを人民に与えなかったこと、民族的資本主義、および帝国主義は、基本的にいって、低開発国の非プロレタリア——半プロレタリア勤労大衆の生活を崩壊させて、『訓練』し『教育』するのに一時的に役立つものであり、『独自』な資本主義は我慢ならないものであり、かつ他人のものであるということを示している」（前出、五一ページ）。

みられるように、「被抑圧階級の困窮零落」を「尖鋭化」させたのは、「資本主義の発展」である。とくに「民族的資本主義」に「独自の資本主義」の発展は勤労大衆の生活を「崩壊」させるものであり「我慢ならない」ものである。これにたいして、帝国主義は主として貿易をつうじて低開発国の経済に、したがってまた勤労大衆の生活に影響をおよぼすことができるだけである（本稿第三節第四項（本誌第二十四卷第三号））。かくして、低開発国の勤労大衆の当面の主要な敵は、「民族的資本主義」に「独自の資本主義」の担い手である民族ブルジョアジーであって、帝国主義とその手先・同盟者ではない、ということになる。

「民族民主主義者のブロック」を構成しているのは、プロレタリアート、農民、インテリゲンチヤ・官吏であると

考えられる。

これら三者のうち、農民は人口の大部分を占めてはいるが、「前期的諸ウクラード」とむすびついており、「国民経済建設の担い手」にはなりえないものである。これは自らを貧農化から半プロレタリア化へ、さらにプロレタリア化することによってはじめて「成長」することができる。したがって、これはたとえ帝国主義・封建主義・資本主義にたいして闘う「民族民主主義者のブロック」を構成する一員になることができるとしても、「ブロック」のヘゲモニーをにぎることはおよそ不可能であるにちがいない。

プロレタリアートは反帝・反封建・反資本主義の闘争を徹底的に遂行することができる。だから、これは「民族民主主義者のブロック」の構成員——しかももっとも先進的な構成員——になりうる。しかし、まだ「弱体」であつて、「いまだ社会の発展を規定する階級とはなっていない」。「労働者階級の指導的役割」は「いまだ整備されていない」のである。したがって、「民族民主主義者のブロック」においてヘゲモニーをにぎることは、これまた不可能であるといわなければならない。

インテリゲンチヤ・官吏はプロレタリアートとならんで「重要な意義」をもち、「国民経済建設の担い手」となりうるものである。かれらは「本性」からして「反植民地的存在」であり、「民主主義革命の擁護者」である。したがって、「民族民主主義者のブロック」の構成員となりうる。しかも、農民もプロレタリアートもそのヘゲモニーをにぎりえないとすれば、インテリゲンチヤ・官吏がそれをにぎっているものと考えざるをえない。ところが、前節でみたように、インテリゲンチヤ・官吏の「組成根拠は一樣ではない」が、「主導的な要素」となっているのは「上層ブルジョア階層」とくに「政府の高級官僚いわゆる官僚ブルジョアジー」である。どうやら、「官僚ブルジョアジー」

は——国家資本主義が「資本主義であることの本質をもちながら、明らかに特別な機能をもつ特殊な経済範疇としてのウクラードとなる」のと同じように——「ブルジョアジーであることの本質をもちながら、明らかに特別な機能をはたす特殊な階級となる」ようである。すなわち、それはブルジョアジーでありながら、反帝・反封建・反資本主義の「民族民主主義者のブロック」の構成員、しかもその「主導的な要素」になりうるようである。

氏は「民族民主主義者のブロック」の規定について、「労働者階級の指導的役割」が「未整備」であっても、「革命的民主主義者の緊密な統一によって資本主義への道を遮断して、非資本主義的發展への階梯を進むことができる」と述べておられる。ここに「革命的民主主義者」とはさきの「民族民主主義者」にほかならないと考えられる。氏は、「官僚ブルジョアジー」のヘゲモニーのもとで、反帝・反封建・反資本主義の革命を遂行することができ、「非資本主義的發展の道」へすすむことができる、と主張しておられるのである。

この主張は「社会主義革命の發展、社会主義社会の建設における労働者階級の決定的役割」を否定し、「労働者階級の指導的役割」なしに社会主義へ移行できるということを意味している。だが、「社会主義革命および社会主義社会建設における労働者階級の指導的役割」については、「マルクスもレーニンも、そして毛沢東も」擁護してきたところである。だから、氏も公然とこれを否定するわけにはいかない。そこで、氏は右の主張と「社会主義革命および社会主義社会建設における労働者階級の指導的役割」とを両立させるために、「いうべきことは、社会主義の建設へ向う、接近のしかた（!?）についてであって、社会主義建設の展開についてではない。まして、その完成についてではない。これらの国々についてのその課題は、まだ遙かなこと（!!）であろう」（前出四九ページ）と述べて、「社会主義の建設」を永遠のかなたにおいてやっておられる。

いったい、低開発国の当面する革命は、「国民経済の自立化」とくに「国家資本主義のもとでの生産企業」の発展を主たる内容とするものであるのか、それとも反帝・反封建・反資本主義の課題を遂行する「一段革命」であるのか？ それともまた、「社会主義の建設」は「遙か」さきのことであるのか？ 氏の議論は混乱がいひのなにものでもないといわなければならないであろう。だが、氏の議論を一貫してつらぬいているものが一つある。それは、反帝・反封建の民族民主革命の遂行とそのための統一戦線の結成およびプロレタリアートのヘゲモニーの確立を否定すること、または「遙か」さきにおいやること、これである。このように社会主義への真の展望をもちえない「展望」、これが氏の「非資本主義的發展の道」にはかならないようである。

(二)

尾崎氏は氏の「非資本主義的發展の道」論をレーニンの叙述に依拠して展開しておられる。氏は「非資本主義」という言葉をとりあげて、およそつぎのような説明をあたえておられる。

非資本主義という言葉は、かつて、一九二〇年にいたるまでは、資本主義の諸法則がいまだその社会を推動させる基本的な役割を果たしていない社会、そういう社会制度を意味していた。それは Pre-Capitalism を意味しており、發展の帰結は資本主義以外にはありえないのであった。しかし一九一七年の出来事は、新しい現実を生みだした。ソヴェト社会主義社会の出現にともなつて、ツァー・ロシアの専制支配のもとにあった中央アジア諸民族やモンゴル民族は、民族主体としての資本主義要素の絶無の中から社会主義への道を歩きはじめた。この歴史的事実が世界革命の実践と理論の問題としてはじめて提起されたのは、一九二〇年の共産主義インタナショナル第二回大会におけるレ

レーニンの「民族・植民地問題小委員会の報告」においてであった（前出、四九ページ）。

このように述べて、氏は、レーニンの「報告」の一部を引用し、レーニンが右の「歴史的事実」をどのようにとらえていたかを明らかにしておられる。氏によって引用されているのは、つぎの部分である。

「問題は、つぎのように出された。すなわち、国民経済発展の資本主義的段階が、いま解放されつつあり、その内部で戦後のいま、進歩の道をすすむ運動がみとめられている後進の諸民族にとって不可避であるという主張を、正しいとみとめることができるか、と。われわれは、この問題に否定の答をした。勝利した革命的プロレタリアートが、これらの民族のあいだで系統的な宣伝をおこない、ソヴェト政府が、自分のもっているすべての手段で、これらの民族の援助に乗りだすならば、**資本主義的發展段階は後進民族にとって不可避だと考えるのは、まちがいである。** あらゆる植民地と後進国で、われわれは、**闘士の自主的なカードル、党組織を結成し、農民ソヴェトを組織するための宣伝**をただちにおこない、**農民ソヴェトを前資本主義的諸条件に適応させるようにつとめなければならないだけでなく、**さらに、**共産主義インタナショナルは、先進国のプロレタリアートの援助をえて、後進国はソヴェト制度へうつり、資本主義的發展段階を飛びこえて、一定的發展段階を経て共産主義へうつることができるという命題を確立し、理論的に基礎づけないければならない**」（『レーニン全集』第三一卷、二二九ページ、邦訳、二三七ページ）。

みられるように、レーニンは、資本主義的發展段階が後進民族にとって不可避だとする考えは誤りであり、後進国はソヴェト制度へうつることによって、資本主義的發展段階を飛びこえて、一定的發展段階をへて共産主義へ移行することができる、と述べている。ただし、ここで注目されなければならないのは、**闘士の自主的なカードルおよび党組織の結成、農民ソヴェトの組織化、ソヴェト制度の前資本主義的諸条件への適用があげられていることである。**

右の命題は、つぎのような革命運動の経験から導きだされたものである。

以前ツァーリズムがもっていた植民地、トゥルケスタンその他の後進国では、まだ前資本主義的諸関係が支配しており、したがって純粋なプロレタリア運動は問題になりえなかった。そこには工業プロレタリアートはほとんどいなかったのである。それにもかかわらず、ロシアの共産主義者は指導者の役割を引きうけなければならなかったし、また実際に引きうけてきた。かれらの活動の経験は、ほとんどプロレタリアートがいなくても、大衆の自主的な政治的思考と自主的な政治活動への意欲を目ざめさせることができることを示した。半封建的な隷属状態にある農民が、ソヴェト組織という考えをよく会得し、それを実際に実現することができることは、明らかであった。ソヴェト組織という考えは、わかりやすい。だから、それは、プロレタリア的關係に適用されるばかりでなく、農民的・封建的および半封建的關係にも、適用されうる。経験は、農民ソヴェト、被搾取者のソヴェトが資本主義国ばかりでなく、前資本主義的諸關係の存在する国々にとつても、有用な手段であるということを、証明した（『レーニン全集』第三一巻、二一七～八ページ、邦訳、二三五～六ページ）。

ロシア人共産主義者の後進国における活動の経験をふまえて、レーニンは右の命題を導きだしたのである。そのさい、われわれがしかと銘記しておかなければならないことは、レーニンの命題においては、ソヴェト制度がきわめて重要な役割を演じており、それへの移行を前提にして資本主義的發展段階の飛びこえおよび共産主義への移行が主張されていること、これである。ここにソヴェト制度とは、すべての勤労大衆のもつとも包括的な組織、大衆のもつとも民主主義的な・もつとも權威ある組織であり、旧来の国家機關をうちこわして、これにとつてかわるプロレタリア国家機關の基礎となりうるものである。

氏はレーニンの命題を「段階飛びこえの理論」と名づけ、これを「非資本主義的發展の道」論の「発端」としてとらえておられる。そして、この「理論」はこんにちでは「より普遍的な適用」が可能になったとして、その「適用を可能にした条件」を——K・ブルテンツの論文「民族解放運動の現段階」の一部分を引用することによって——呈示しておられる。

「こんにちの情勢のもとでは、非資本主義的發展の理論と実践は、新しい資料によって豊かにされている。第一に、非資本主義的發展の可能性は解放された諸国の圧倒的多数にとって実在的なものになった。以前には、このために特別有利な諸条件……が要求されたが、こんにちでは、……すでに決定的な意義をもっていない。なぜなら社会主義世界体制が存在しているからである。第二に、……解放された諸国の社会發展の新しい過渡的な諸形態が生じ、ますます多様なものとなりつつある。これは、……これら諸国がしばしば立ち遅れた社会関係から社会的解放への自己の運動をはじめていることによっても説明される。……第三に、非資本主義的・社会主義的發展の軌道への移行過程を指導しつつある政治的連合の先頭に、多くの国では——一定の条件下に——革命的民衆力が立ちうへ」(K. Брутенц, «Современный Этап Национально-Освободительного Движения», Коммунист, 1964, No.17. стр. 29~30)。

ここで述べられている三つの「条件」は、はたしてよく、「段階飛びこえの理論」の「より普遍的な適用」を可能にしうるものであろうか？

第一の「条件」は、「社会主義世界体制」が存在しているということによって、「非資本主義的發展の道」が「解放された諸国の圧倒的多数にとって実在的なものになった」ということである。レーニンの「段階飛びこえの理論」に

おいては、ソヴェト制度の基本原則を前資本主義的諸条件に適應させて、闘士の自主的なカードルおよび党組織の結成と農民ソヴェトの組織化をおこなうこと、これが不可欠の条件となっていた。つまり、後進国はソヴェト制度へうつらないかぎり、資本主義的發展段階を飛びこえることはできないのであった。ところが、氏によれば、こんにちでは、ソヴェト制度は「非資本主義的發展の道」にとって不可欠の条件ではなくなったのである。なぜならば、こんにちでは、「社会主義世界体制」が存在しているからである！ もっとも、氏の「非資本主義的發展の道」がソヴェト制度の樹立を不可欠の条件としないのは、それがレーニンの命題におけるように「資本主義的發展段階を飛びこえて、一定的發展段階を経て共產主義へうつる」ことを意味するものとしてではなく、「社会主義の建設へ向う接近」を意味するものとして、したがって「社会主義の建設」はまだまだ「遙かなこと」だとして、とらえられている以上、当然のことであるといえよう。われわれがすでに本稿第四節第四項（本誌第二十四卷第四号）においてみたように、氏はつぎのように、すなわち「総括的經濟範疇」たる国家資本主義は一方では生産力を發展させて社会主義のための物質的基礎をつくりだし、他方ではプロレタリアートを生みだし強化して社会主義のための主体的勢力をつくりだす、と主張しておられた。そして「非資本主義的發展の道」はこのような役割を演じる国家資本主義の發展によつてはじめてきりひらかれるのであった。もしそうだとすれば、氏の「非資本主義的發展の道」は社会主義への道ではなくて、資本主義への道であるといわなければならないのではなからうか。氏の「非資本主義的發展の道」はソヴェト制度やプロレタリアートを主導勢力とする人民各層の連合独裁とははじめから無縁なものであったといわなければならないのではなからうか。

第二の「条件」は、低開發国では「社会發展の新しい過渡的諸形態が発生し、ますます多様なものとなりつつあ

る」ということである。ここには社会発展の「過渡的諸形態の発生」および「多様化」があげられているが、このばあいの「過渡」はレーニンの命題にみられるように「資本主義的發展段階を飛びこえて共產主義へうつる」ことを意味するものではなく、社会主義への「接近」を意味するものにすぎず、したがってその「諸形態」も「資本主義的發展段階の飛びこえ」についての「諸形態」ではなく、社会主義への「接近のしかた」の「諸形態」にすぎないといえよう。低開発国が「資本主義的發展段階を飛びこえて社会主義へうつる」ためには、すなわち社会主義へ到達するためには、いかに社会発展の「新しい形態」が「発生」し「多様化」したとしても、かならず、ソヴェト制度およびこれを基礎とする人民各層の連合独裁（プロレタリア独裁の一変種）が樹立されなければならないのである。⁽³⁶⁾

(36) レーニンは論文「マルクス主義の戯画と『帝国主義的経済主義』とについて」において資本主義国の「社会主義へ行く道」の「多様性」を指摘して、「民主主義のあれこれの形態」、「プロレタリアートの独裁のあれこれの変種」および「社会主義的改造のあれこれの速度」をあげている（『レーニン全集』第三卷、五八ページ、邦訳、七一ページ）。これらの言葉は「社会主義へ行く道」の「多様性」を示すものであるだけでなく、これらをつうじてはじめて「社会主義へ行く道」ことができることを示すものである。

第三の「条件」は、「非資本主義的・社会主義的發展の軌道への移行過程を指導しつつある政治的連合の先頭に、多くの国では革命的民主勢力が立ちうる」ということである。これによれば、「非資本主義的・社会主義的發展の道」への「移行過程」は「革命的民主勢力」によって「指導」されるのであって、かならずしもプロレタリアートの指導を必要としないのである。とはいえ、氏はプロレタリアートの指導やその前衛党の存在の必要性一般を否定しておられるのではない。「一国的」または「民族的」なプロレタリアートの指導や前衛党の存在の必要性だけを否定しておられる。プロレタリアートが「弱体」であって、「いまだ社会の發展を規定する階級とはなっていない」という条件

のもとでは、「社会主義世界体制」が「プロレタリアートの前衛の役割を果たす(!!)」(前出、五二ページ)のである。だから、低開発国は、たとえ国内にプロレタリアートの指導や前衛党の存在がみられないとしても、また「民族的、プロレタリア独裁(!?)」(前出、四八ページ)が樹立されなくても、りっぱに「非資本主義的・社会主義的發展の道」を歩むことができる、というのである。

以上のように、「段階飛びこえの理論」の「より普遍的な適用」とは、「資本主義的發展段階を飛びこえて、一定の發展段階を経て共產主義へうつる」という、その本来の内容を骨ぬきにして、社会主義への「接近」——ここでは社会主義はまだまだ「遙か」さきのことである——に矮小化することにほかならない。そして、その「より普遍的な適用を可能にした条件」とは、簡単にいえば、「社会主義世界体制」の存在ということである。「社会主義世界体制」は前衛党やソヴェト制度にとつてかわつて、それらの役割を演じることができるのである。いまや、低開発国は、「社会主義世界体制」が存在していることによって、プロレタリアートのヘゲモニーの確立や前衛党の指導なしに、ソヴェト制度を樹立することなしに、プロレタリアートを主導勢力とする人民各層の連合独裁を樹立することなしに、「非資本主義的發展の道」をへて社会主義へ到達することができる、というのである。まことに、絶大な力をもつ「社会主義世界体制」ではないか。だが、これについては、すでに本稿第二節(本誌第二十四卷第二号)において検討がくわえられたところであり、氏が強調される社会主義の「強大化」(および帝国主義の「弱体化」)は、現実存在している社会主義(および帝国主義)とはおよそ縁遠いものであることが明らかにされたところである。

(三)

さて、尾崎氏は、レーニンの「段階飛びこえの理論」とその「より普遍的な適用を可能にした条件」をふまえて、つぎに、こんにちの低開發国における「非資本主義的發展的道の」「不可避性」とそのもとでの「生産關係の移行形態」とを究明しておられる。

まず、「非資本主義的發展的道の」「不可避性」からみていくことにしよう。

氏は、プロレタリアートが「社會發展の指導力」となっていないという条件のもとでは、「中間的な諸層」が「革命の指導要素」となるが、そのさい、かれらとくに「非プロレタリア——半プロレタリア勤勞大衆、農民」を「社會的闘争」にまきこんでいく過程には三つの要因が作用しているとして、それぞれの要因について説明し、そのうえで、それら諸要因が「低開發国の資本主義的發展を志向する傾向」によって強化される（前出、五一―二ページ）と述べて、その傾向についてつぎのような説明をあたえておられる。

「その傾向は、明らかに植民地時代から繼承した資本主義の矛盾を直接反映している。その第一は、資本主義的國際關係による矛盾である。帝國主義は、將來の擄取の對象として、これらの國を体制内に止めておくために、いわゆる『第三世界』として定着させることに利害をもっている。そのために、低開發国の經濟狀態を、現代的水準に『引きあげ』、ある範圍の限定された、工業化を『援け』ることを余儀なくされる。つまり帝國主義は、みずからがそれに依拠した古い植民地的經濟構造を温存することと、破壊することに同時に利益を持たねばならないということである。第二は、低開發国の国内的性格の矛盾である。低開發国のブルジョアジーは、自主的な資本主義的發展を望んでいるが、その傾向は、帝國主義から離脱することであるにも拘らず、今日資本主義世界体制に依拠する限り、その資本の活動軌範から脱して独自の發展を保障することができないということ、かつ、植民地時代からの自己の半封建

的搾取を手ばなさずに、資本主義的發展は期待できないということ、したがって、国内の一般民主主義的要求と、帝国主義の経済的浸透との挾撃の中で、自家撞着に陥って、独自の活路が見出せないということ、等々である」(前出、五二―三ページ)。

みられるように、「低開發国の資本主義的發展を志向する傾向」は「植民地時代から継承した資本主義の矛盾」——「資本主義的国際関係による矛盾」および「低開發国の国内的性格の矛盾」——を「直接反映」しているのである。しかし、これら二つの「矛盾」がどのようなものであり、どのようにして「資本主義的發展を志向する傾向」に「直接反映」されるかという点は、かならずしも明確に説明されているわけではない。

第一の「矛盾」の説明によれば、帝国主義は低開發国を「第三世界」として「定着」させようとしている。なぜならば、そうすることによって、低開發国を「体制内」にとどめておくことができ、かくして「将来の搾取の対象」とすることができからである。つまり、帝国主義は、低開發国が政治的独立を達成したことによって、それを「搾取の対象」とすることができなくなったが、「第三世界」として「体制内」にとどめておけば、「将来」、ふたたび、「搾取の対象」に転化させることができるであろう、というのである。その「将来の搾取」のために、帝国主義は「低開發国の経済状態を現代的水準に引きあげ、ある範囲の限定された工業化を援け」、そうすることによって、「体制離脱」を阻止しようとするのである。かくして、帝国主義は「古い植民地の経済構造を温存すること、破壊することと同時に利益を持つ」ことになる。ここに「古い植民地の経済構造」とは、「本国の工業に対する補助的な農業・原料供給地」(前出、二六ページ)という植民地に独自の「社会的再生産構造」のことである。これは独立後においても「継承」されており、そのために、帝国主義は貿易をつうじて「利益」をうることができる。だが、同時に、帝国主

義は低開発国を「体制内」にとどめておくために、「経済水準の引きあげおよびある範囲の限定された工業化」（古い植民地的経済構造の破壊）を容認し、「援け」ざるをえない。帝国主義にとっては、「古い植民地的経済構造」の「温存」も「破壊」もともに「利益」なのである。前者は帝国主義のいわば「現在の利益」を、後者はいわば「将来の利益」をあらわしているのである。

どうやら、第一の「矛盾」は「資本主義的国際関係による矛盾」と名づけられてはいるが、実際には、帝国主義の「現在の利益」と「将来の利益」とのあいだの「矛盾」であるようだ。そして、「低開発国の資本主義的發展を志向する傾向」が「直接反映」しているのは、この「矛盾」ではなく、「矛盾」の一方の要因としての「将来の利益」にほかならない。ところで、ここに「低開発国の資本主義的發展」とは、「体制内」における「経済水準の引きあげおよび工業化」——これは「前期的諸ウクライド」を「資本主義的ウクライド」へ「統一」することによって達成される——を意味しており、つぎにみるように民族ブルジョアジーが強く「望んでいる」ものである。かくして、帝国主義の「将来の利益」と民族ブルジョアジーの「強い希望」とは、みごとに一致することになるのである。

つぎに第二の「矛盾」について。氏の説明によれば、「低開発国のブルジョアジー」は「自主的な資本主義的發展を望んでいる」のだが、これは「資本主義世界体制に依拠する限り」達成されない。ところが、帝国主義は、右にみたように、その「将来の利益」のために、低開発国の「経済水準の引きあげおよび工業化」すなわち「自主的な資本主義的發展」を——「限定された範囲」においてであるとはいえ——「援け」ざるをえない。もし、「低開発国のブルジョアジー」が「自主的な資本主義的發展」を「望み」、帝国主義がこれを「援け」とすれば、これは「資本主義世界体制内」においてりっぱに「保障」されることになるのではないだろうか？　だが、氏によれば、これは「資本

主義世界体制に依拠する限り」およそ不可能なのである。どうやら、ここでは、帝国主義の「現在の利益」が「将来の利益」を圧倒しており、帝国主義が低開発国の「経済水準の引きあげおよび工業化」を「援け」ることはほとんどありえない、と理解しなければならぬようである。

さらに氏は、「低開発国のブルジョアジー」が「植民地時代からの自己の半封建的搾取を手ばなさない」かぎり、「資本主義的發展は期待できない」と述べておられる。これは、氏が「低開発国のブルジョアジー」を、「植民地時代からの半封建的搾取」をおこなないながら、同時に「自主的な資本主義的發展を望んでいる」ものとしてとらえておられることを示している。だが、「自主的な資本主義的發展」は、それが「古い植民地的経済構造の破壊」すなわち「前期的諸ウクライド」の「資本主義的ウクライド」への「統一」を意味している以上、「植民地時代からの半封建的搾取」を不可能にする。いいかえれば、「半封建的搾取」によって利益をえているものがそれを不可能にする「自主的な資本主義的發展を望む」ということは、とうてい考えられないし、また現にありえない。一方は買弁ブルジョアジー（および封建的地主）にかかわる事柄であり、他方は民族ブルジョアジーにかかわる事柄である。氏は両者を混同しておられるのである。

氏は、右のような混乱した説明を「したがって」とうけて、「低開発国のブルジョアジー」は「国内の一般民主主義的要求と、帝国主義の経済的浸透との挾撃の中で、自家撞着に陥って、独自の活路が見出せない」と述べておられるが、「自家撞着に陥って独自の活路が見出せない」のは「低開発国のブルジョアジー」ではなく、むしろ氏の議論そのものではなからうか。

氏は二つの「矛盾」およびそれらと「低開発国の資本主義的發展を志向する傾向」との関連を以上のように把握

し、そのうえにたつて、「独自の活路」を「非資本主義的發展の道」に見いだしておられる。

「低開発国における發展の一般的环境、その特徴をこのように考えるならば、これらの国の自立的發展の道は、『第三の道』または『第三世界』の中に見出されるのではなくて、それぞれの国の反帝国主義、反封建闘争だけでなく、国の内部の特殊な資本主義的方策そのものによって、非資本主義的發展の道は不可避免的に導きだされるであろう」（前出、五三ページ）。

みられるように、「独自の活路」たる「非資本主義的發展の道」は「反帝・反封建闘争」および「国の内部の特殊な資本主義の方策そのもの」によって「不可避免的に」導きだされるのである。このうち決定的に重要な役割を演ずるのは、後者である。前者の演ずる役割は小さなものにすぎない。「反帝闘争」といっても、その内容は主として「輸出市場の転換」の闘争であり、また「半封建闘争」といっても、それは国民經濟のうちの「民族的近代部門」とくに「国家資本主義のもとでの生産企業」を發展させ、これをつうじて「前期的諸ウクライド」の「資本主義的ウクライド」への「統一」をなしとげようとするものであつて、およそ土地問題を解決しうるものではない。後者こそ、「非資本主義的發展の道」にとって絶大な力を發揮せねばならぬものである。

後者すなわち「国の内部の特殊な資本主義の方策」とは、国家資本主義のことにほかならない。氏は国家資本主義については二つの節（第一章第四節および第二章第一節）をもうけて詳細な検討をくわえておられた。それにもかかわらず、その第一の役割はつぎのように——「国家資本主義は、資本主義であることの本質をもちながら、明らかに特別な機能をもつ特殊な經濟範疇としてのウクライドとなる」（前出、二五ページ）、国家資本主義は「社会主義への接合に特殊な経路（非資本主義的發展の道）を見出す物質的基礎となる」（前出、二六ページ）、「体制離脱の課題は、急速

な国民経済形成・発展の過程で進行する階級諸関係の質量的変化を条件として進展する。その過程の基礎的な土台を埋めるものが、後進国の国家資本主義である」(前出、三八〇九ページ)と——説明されたにとどまっている。そこで、氏は、ここでもたまたま国家資本主義をとりあげて、これが「生産関係を転換させる特別な経済形態」Ⅱ「移行のための半社会主義的形態」にほかならないことを明らかにしようとしておられるのである。

(四)

尾崎氏は国家資本主義についてつぎのような「形態」規定をあたえておられる。

「すべての低開発諸国にとって、その国際的環境は一体であっても、国内諸力の相互関係は、多種多様である。現代世界経済におけるその特殊な地位、その発展の性格、発展の道の選択の客観的不可避性は、二つの発展の道の現実の闘争、各国における二つの傾向のからみあいの中で、すべてそれぞれ規定しあいながら、生産関係を転換させる特別な経済形態を生みだし、再生産させている。非資本主義的發展の前提と条件を強める再生産過程は、過渡的要素(私的資本主義的支配関係の稀薄な公的セクター、協同組合、中央計画等々、自主的管理可能な『援助』を強化し、新たな生産関係とそれにもとづく新たな社会関係の発生を促し、移行のための半社会主義的形態を発生させる。この際、留意すべきことは、移行の半社会主義的形態とは、資本主義と訣別した特別な『非資本主義的生産関係——(そんなものはない)』を創り出すということではなくて、移行のための経済範疇としての特殊な形態となるということである。国家資本主義のもとでの諸要素が、どのような形態をとろうと、資本主義は資本主義である限り、それは人民収奪の体系であるという原則論を、ここでは問題とするのではない。こうした傾向が、移行の条件を整備し累加す

ることである。したがって、この特殊な形態が自律的に転換運動を發動するのではなくて、資本主義的諸関係の制約——国際分業における植民地性、資本主義国際市場の閉塞性、国内における私的資本主義の脆弱性等々——それと関連する一般社会関係の発展によって制約されて、本来の資本主義的發展の傾向が歪曲される。つまり、特殊形態は、他律的に形成されたものであり、その運動過程において、逐次自律的な要因を内的に蓄積するということがある。くりかえしいうならば、社会主義的経済範疇ではない半社会主義要素（形態）は、発生的には資本主義的経済範疇に属しながら、資本主義の諸法則の貫徹を制限・阻止する特別な条件を背負った経済形態であるということによって、一種特別な役割をもつ過渡期の経済範疇として措定することができる。

非資本主義的發展の道は、このような経済過程を土台とする民族民主国家によって選択され、展開される『資本主義から社会主義へ』の時代の、資本主義的發展に立ち遅れた国の、社会主義へ志向する媒介的な（それ故に未だ動搖性の多い）前駆小段階である」（前出、五三〜四ページ）。

われわれがゴシック体にした言葉——「生産関係を転換させる特別な経済形態」、「過渡的要素」、「移行のための半社会主義的形態」、「移行のための経済範疇としての特殊な形態」、「半社会主義要素（形態）」、「資本主義の諸法則の貫徹を制限・阻止する特別な条件を背負った経済形態」、「一種特別な役割をもつ過渡期の経済範疇」——はすべて、国家資本主義を規定したものである。これらの言葉における「転換」、「過渡」、「移行」は、「封建制から資本主義へ」および「資本主義から社会主義へ」という二重の「転換」、「過渡」、「移行」を意味しており、しかも両者は「同時に」または「重複一体化」しておこなわれるのであった。つまり、こんにちの低開発国には、二重の「転換」、「二重の「過渡」、二重の「移行」をなしとげる「経済形態」が生みだされて、現に活躍しているのであり、国家資本主義

こそ、この「経済形態」にほかならない、というのである。

では、国家資本主義、たとえば「私的資本主義的支配関係の稀薄な公的セクター」によって、どのような生産関係がどのように「転換」させられるであろうか？ また、どのような「移行」がどのようにしてなしとげられるであろうか？ 大切なのは、このような内容上の説明でなければならないのではなからうか。この点の説明があたえられなにかぎり、「生産関係を転換させる特別な経済形態」とか、「移行のための半社会主義的形態」とかいう言葉をいくらならべたててみたところで、それらはまったく内容のない、たんなるお題目におわることにならざるをえないであろう。

氏は、第二章第一節において国家資本主義の役割を究明して、つぎのように、すなわち国家資本主義は「前期的諸ウクライド」を「資本主義的ウクライド」へ「統一」することによって「国民経済の再編成」をおこなおうとするものであり、この「再編成」をつうじてはじめて「現代的タイプの工業プロレタリアート」が「成長」し、「階級関係の質量の変化」が生ずる、と述べておられた。国家資本主義は、一方では「前期的生産関係」を「資本主義的生産関係」に「転換」し、そうすることによって生産力を発展させ、他方ではプロレタリアートを生みだし強化する、というのである。とすれば、国家資本主義によって遂行されるのは、「封建制から資本主義への移行」にすぎないといわなければならない。いまひとつの「移行」すなわち「資本主義から社会主義への移行」は、国家資本主義によって社会主義のための客観的および主体的諸条件が形成されたのちのことであり、したがってまだ「揺か」さきのことである。国家資本主義は二重の「転換」をなしとげる「特別な経済形態」ではなく、二重の「移行」をなしとげる「半社会主義的形態」でもないといわなければならない。氏は国家資本主義を「特別な経済形態」または「半社会主義的形

態」等とたんに「宣言」しておられるだけである。

われわれがすでに本稿第三節（本誌第二十四卷第三号）でみたように、氏は、革命直後のロシアにおける「社会主義制度の諸要素」についてのレーニンの規定に「ならって」、こんにちの低開発国に現存するウクラードを規定して、国家資本主義の二重の役割を導きだされたのであった。だが、そのさい、氏は当時のロシアとこんにちの低開発国とにおける決定的なちがいを軽視しておられた。それは国家の性格と階級的内容のちがいである。

レーニンは、ロシアの「社会主義制度の諸要素」を規定した同じ論文において、国家資本主義が現状にくらべると「一歩前進」であることを立ちいって説明すべく、社会主義のための客観的ならびに主体的諸条件についてつぎのように述べている。

「問題をもっとよく説明するために、まず第一に、国家資本主義のもっとも具体的な例をあげよう。周知のように、この例というのはドイツである。ドイツには、現代の大資本主義的技術と、ユニカー的ブルジョア的な帝国主義に従属する計画的組織との『最後の言葉』」がある。傍点をつけた言葉をとりかけて、軍事的、ユニカー的、ブルジョア的な、帝国主義的な国家のかわりに、おなじく国家を、だがちがった社会的な型の国家を、ちがった階級的内容の国家を、ソヴェト国家すなわちプロレタリア国家をにおいてみたまえ。そうすると、社会主義があたえる諸条件の総和がえられるであろう。

社会主義は、最新の科学の最後の言葉にもとづいてきずかれた大資本主義的技術なしには、物資の生産と分配にあたって、数千万の人々に単一の規準を厳守させる、計画的な国家組織なしには、ありえない。われわれマルクス主義者は、いつもそう言ってきた……。

それとともに、社会主義は、プロレタリアートの国家支配なしには考えられない。これまたイロハである。歴史は、独特な歩みをして、一九一八年になるころまでに社会主義の二つの片われを、国際帝国主義という一つの殻のうちに、ちやうど未来の二羽のひよこのように、ならべてうみだした。ドイツとロシアとは、一九一八年には、一方では社会主義の経済的、生産的、社会経済的諸条件の、他方では、その政治的諸条件の、物質的実現を、なによりもはっきりと体现した」(『左翼的』な児童と小ブルジョア性について、『レーニン全集』第二七卷、三〇六―七ページ、邦訳、三四二―三ページ、傍点——レーニン)。

ここには、「社会主義があたえる諸条件の総和」が明確に示されている。すなわち、一つは「現代の大資本主義的技術」と「物資の生産と分配における計画的な国家組織」であり、いま一つは「プロレタリアートの国家支配」である。これら両者がともに存在するでなければ、社会主義とはいえない。⁽³⁷⁾一九一八年には、ドイツが前者を、ロシアが後者を体现していた。当時のロシアでは、「プロレタリアートの国家支配」は実現されたが、「現代の大資本主義的技術と計画的な国家組織」が欠けていた。小ブルジョア的自然発生性が優勢であったのである。この点ではドイツの国家資本主義を見ない、まなぶ必要があった。国家資本主義はロシアにとって「一步前進」であったのである。そこで、レーニンは、つぎのように、すなわちソヴェト権力は、国家資本主義を利用して、「記帳と統制」、「あらゆる国家的干渉」をおこない、こうして労働生産性をたかめ、実際に生産を社会化しなければならない、と主張したのである。

(37) 「共産主義とは、ソヴェト権力プラス、全国の電化である」(「わが国の内外情勢と党の任務」、『レーニン全集』第三二卷、三九二ページ、邦訳、四二二ページ)というレーニンの有名な命題は、「社会主義があたえる諸条件の総和」を簡潔に規定し

たものである。ここに「ソヴェト権力」とは「プロレタリアートの国家支配」を意味し、「電化」とは電化にもとづく大規模な工業＝社会主義の物質的基礎を意味している。

ところが、こんにちの低開發国では——形式的な独立をかちとつたにすぎない国を別にすれば——、民族ブルジョアジーが国家権力をにぎっている。ここでは、たとえ国家資本主義にもとづいて大規模な工業をうちたて、生産を社会化することができたとしても、それは社会主義のための物質的基礎の形成を意味するにすぎない。もう一方の要因である「プロレタリアートの国家支配」（独裁）が実現されないかぎり、社会主義をうちたてることはとうてい不可能である。国家資本主義を發展させることによって、プロレタリアートの独裁——その一変種としての人民連合独裁——を樹立することができないことは、明白であろう。そればかりではない。生産力を發展させるという面についても、国家資本主義によつてはたしてどこまで可能か、はなはだ疑問とならざるをえない。なぜならば、氏の国家資本主義は、すでにみたように、一方では既存の生産諸関係とくに「古い型の農業」を變革することなく、それをほぼ現状のまま維持して、そのうえに「接木」されたものにすぎず、他方では帝國主義の經濟的支配をたちきることができず、ばあいによつてはむしろそれを強化するテコとなっているからである。したがって、氏の国家資本主義は、「封建制から資本主義への移行」において一定の役割をはたすことができるとしても、「資本主義から社会主義への移行」をなしとげることができるものではなく、したがってまた「特別な經濟形態」または「半社会主義的形態」とはとうていいえないシロモノであるといわなければならない。

氏は、この「特別な形態」が「資本主義的諸關係の制約、それと関連する一般社会關係の發展によつて制約されて、本来の資本主義的發展の傾向が歪曲される」と述べておられるが、例によつて、その「歪曲」の中味については

すこしも明らかにされていない。「③の小商品生産ウクライドは、本来、自然、成長的には、④の私経営資本主義ウクライドへ進むものであるが、……」(前出、二六ページ)とか、「前期的諸ウクライド」が「急速な国民経済自立化の要求によって、自然、成長性に委ねられず、したがって、直接的に資本主義的純化が逐げられずに、国家資本主義を媒介せざるをえないのは、……」(前出、三〇ページ)という氏自身の表現からみて、「本来の資本主義的發展の傾向」とは私経営的資本主義を中心とした「資本主義的發展」であり、その「歪曲」とは国家資本主義を中心とした「資本主義的發展」であると考えられる。氏は両者における「資本主義的發展」の相違を拡大して、後者を「非資本主義的發展」と称しておられるのである。これがまったく誤ったものであることは、明白であらう。氏自身の表現からみても、両者はともに「資本主義的發展」であり、たんにその「發展」のおこなわれ方が異なるにすぎないのである。

さらに氏は、国家資本主義は「発生史的には資本主義的經濟範疇に属しながら、資本主義の諸法則の貫徹を制限・阻止する特別な条件を背負った經濟形態」であり、「一種特別な役割をもつ過渡期の經濟範疇」であると主張しておられるが、これまでの検討からすでに明らかのように、国家資本主義は「資本主義の諸法則の貫徹を制限・阻止するものではなく、また「特別な役割」をもつものでもない。「資本主義の諸法則」は国家資本主義のもとでもりっぱに貫徹しているのであり、国家資本主義は社会主義のための客観的・主体的諸条件をつくりだすという資本主義の歴史的使命をはたすにすぎない。氏の「非資本主義的發展の道」は、それがこのような国家資本主義を「基礎的な土台」とするものである以上、「資本主義的發展に立ち遅れた国の、社会主義へ志向する媒介的な前駆小段階」ではなくて、「資本主義的發展に立ち遅れた国の、資本主義へ志向する媒介的な段階」であるといわなければならないであらう。しかも、実際には、低開発国が国家資本主義をテコにして「資本主義への志向」を実現することはきわめて困難であ

り、逆に、やがて再び帝國主義への從屬を強化することになる危険性がきわめて大きいといわなければならないであろう。

むすび

われわれは尾崎氏の論稿を四回にわけて検討してきたのであるが、それによって、われわれが当初かかげた課題、すなわち氏の「低開發国政治經濟論」、したがってまた「非資本主義的發展の道」論の理論的性格および客觀的役割の究明は、一応達成することができたようにおもふ。そこで、われわれとしては、以下、簡単に、「非資本主義的發展の道」という言葉の正しい内容を呈示することによって「むすび」にかえることにしたいとおもう。

「非資本主義的發展の道」という言葉は、レーニンの命題に示されているように、「資本主義的發展段階を飛びこえて直接社会主義へすすむ」という意味にとらえるのでなければならない。この言葉をこれがいの意味において用いるばあいには、氏の議論が示しているように、社会主義とはおよそ縁遠いものにならざるをえないであろう。

帝國主義にたいする闘争と封建制にたいする闘争とを結合し、民族民主革命を徹底的に遂行して、資本主義的發展段階をへずに直接社会主義へすすむ、——これこそが低開發国に眞の独立、眞の民主主義、眞の繁栄を保障する唯一の道である。

ベトナム労働党第一書記レ・ズアンは、「民族・民主の旗を高くかけ、資本主義的發展の段階をとびこえて直接社会主義にすすむ——わが党のこの戰略路線は過去四〇年以上におよぶベトナム革命の現実と、世界革命の現実とに

よつて、全面的に正しいことが証明されている」(「ベトナム革命の基本問題と主要任務」、邦訳、『世界政治資料』、三四八号、一一ページ)と述べている。ベトナム労働党は創立いらい一貫してこの路線を堅持してたかつてきたのである。

ベトナム労働党の最初の「政治綱領」(一九三〇年一〇月、第一回中央委員会で採択)は、革命の性格と任務をつぎのように規定している。すなわち、十月革命いらい、ベトナム革命は世界プロレタリア革命とむすびつき、その一部分となった。ベトナム革命は二つの段階をへなければならぬ。第一の段階は、労働者階級が指導するブルジョア民主主義革命であり、その任務はフランス帝国主義を打倒して完全な独立をなしとげ、封建制度を一掃して土地を農民にあたえることである。反帝国主義と反封建制度の二つの任務はたがいに関接にむすびついている。これらの任務を基本的に達成したのち、革命は第二の段階、すなわち資本主義的發展段階をへることなしに直接社会主義へすすめる段階へ移行する。これらの目標に到達するためには、労働ソヴェト政権が樹立されなければならない(アジア・アフリカ研究所編『資料ベトナム解放史』第一巻、二二五〜八ページ)。

第二回党大会(一九五一年二月)におけるチュオン・チンの「ベトナム革命について」の報告は、「わが国のような国におけるブルジョア民主主義革命を民族人民民主主義革命とよぶ」と述べ、この革命によって、フランス帝国主義侵略者を追いだし、帝国主義の手先である封建勢力をうちたおし、民族独立をかちとり、人民民主主義を実現する、そしてそののち、さらにすすんで社会主義革命を遂行し、資本主義的發展段階をへることなく社会主義社会を建設する、と説明している(「ベトナム労働党四〇年史」、前出、第三巻、三四ページ)。また、第二回党大会で採択された「政治綱領」はつぎのように指摘している。「ベトナム革命の主要任務は、帝国主義侵略者を駆逐し人民に完全な独立と統一を獲得させ、敵占領地域内の植民地制度を消滅し、また封建主義および半封建主義の残滓を根絶し、耕す者に土

地を所有させ、さらに人民民主主義政權を發展させ、かつ社會主義のための基礎をおくことにある」（前出、第一卷、五〇九ページ）と。

さらに、一九六〇年九月に開かれた第三回党大会は、右の路線の正しさを確認し、そのうえで、「北部を社會主義へと急速に前進させ、強力に前進させ、着実に前進させる」ことをめざす総路線を提起して、プロレタリア独裁を強化し、生産手段の私的所有に主として基礎をおく經濟から生産手段の全人民的所有および集團的所有に基礎をおく經濟へ、小生産制度から大規模生産制度へ、分散した後進的な經濟からバランスのとれた近代的な經濟へと北部を前進させることをめざして、あらゆる分野での社會主義的變革をおこなわなければならない、と指摘している（レ・ズアの第三回党大会報告「輝かしい未來をめざして」、前出、第三卷、一七九—一八一ページ、「ベトナム労働党四〇年史」、同書、四四—八ページ）。現在、ベトナム北部は、第三回党大会で確定された「総路線」にもとづいて、生産關係革命、技術革命、思想・文化革命を同時に遂行して、私的小生産を社會主義的大規模生産にかえ、社會主義の物質的ならびに技術的基礎——經濟的土台——を建設しつつあるのである。

ベトナム革命の経験にてらしてみると、「非資本主義的發展の道」という言葉はその本来の意味において——尾崎氏の表現を用いれば「段階飛びこえ」として——理解されなければならないこと、そして「資本主義的發展段階の飛びこえ」はプロレタリア独裁のもとではじめて可能であること、これらの点はいまや明白であるといわなければならないであらう。